



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

# ファカルティ・ディベロップメント 報告書 2021

2022年3月

FD部会

## はじめに

今年度は新型コロナウイルス感染症への本格的対応が始まって 2 年目という年でした。そのため、学生も教員も、新たな遠隔授業というスタイルにも慣れ、新たな選択肢として受け入れていく過程にあると言っても良いと思います。事実、大学院などでは、遠隔というスタイル故に遠方の学生の志望が増えたりもしました。教員の側では、Google Classroom などのツールを用いて、リアルタイムに学生にクイズを出したり、映像資料をうまく組みこむなど、授業に新たな工夫を組み入れる良い機会にもなりました。そういった事情もあつてか、(FD と直接関わっているわけではありませんが) 学生に何度か回答してもらったアンケートによれば、以前と比べて対面授業への渴望が弱くなったように感じます。

ただ、教育効果の観点から、少人数教育を重視してきている本学においては、可能な限り対面授業を再開するという方針を立てて、教育活動を運営してきました。それゆえに、昨年度は遠隔かまたは対面かという二者択一で考えることが出来たのに対して、今年度は遠隔と対面の混在という新たな課題を抱えるようになりました。具体的には、一日の時間割の中で両者が混在し、学生がうまく対応しなければならない問題などです。また、教室の収容人数の関係(最大 150 名)から、登録人数の多いクラスでは、2つの教室に分けて遠隔ツールで両者を結んだり、対面を断念し遠隔で開講しなければならなかったりしたこともあります。こういった物理的条件の問題が、学生の勉学意欲にどのような影響を与えたのか、今後の課題になると思います。

文部科学省は、今回の経験を踏まえ、これまで卒業単位の 60 単位までしか遠隔授業を認めないなどの縛りを緩和する方向を示しています。今後、新型コロナウイルスの感染が終息したとしても、遠隔授業がなくなっていくわけではなく、対面とともに残り続けていくことになるでしょう。学生も教員もうまく付き合っていくことが求められます。

現状では、FD の授業評価アンケートは、コロナ禍以前のような紙ベースのアンケートから、Google Forms を使った web スタイルに移行し、金銭的費用も含め負担の軽減が図られました。他方で、回収率が低くなってしまったという課題も見えています。また、狭く FD でのアンケートでは捉えられない、大学における学生の居場所感の醸成をどうするかなど、広い意味で本来のファカルティ・ディベロップメントが求められているように思います。

最後に、本部会の運営にご尽力いただいたメンバーの皆さん、また授業評価アンケートの企画・運営や本報告書の整理・編集、会議の準備にご尽力いただいた教育推進課の高橋主任に深く感謝いたしますとともにここに記します。

2022 年 3 月

2021 年度教育研究委員会 FD 部会 FD 部会長 廣瀬弘毅

# 目次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1. 1 委員の構成	1
1. 2 事業の実施状況	1
1. 2. 1 授業評価	1
1. 2. 2 授業公開	12
1. 2. 3 FD研修	12
1. 2. 4 実施要項	12
2. 各部局のFD活動	
2. 1 経済学部	
2. 1. 1 授業評価	14
2. 1. 2 授業公開	15
2. 1. 3 カリキュラム関わる授業改善活動：「緩やかな履修モデル」の提示	15
2. 1. 4 授業改善に関わる目下の取り組みと課題	17
2. 2 生物資源学部	
2. 2. 1 授業評価	19
2. 2. 2 授業公開の方針と実績	20
2. 2. 3 授業改善活動についての課題と展望	21
2. 3 海洋生物資源学部	
2. 3. 1 授業評価アンケート	22
2. 3. 2 学生アンケート	22
2. 3. 3 授業公開	23
2. 3. 4 授業改善についての課題と展望	24
2. 4 看護福祉学部	
2. 4. 1 授業評価	25
2. 4. 2 遠隔授業に関する実態調査	26
2. 4. 3 授業公開	29
2. 4. 4 授業改善への取り組みと今後の課題と展望	30
2. 5 学術教養センター	
2. 5. 1 授業評価アンケートの結果	31
2. 5. 2 授業公開の方針と実績	32
2. 5. 3 FD研修	33
2. 5. 4 授業改善の取り組みと今後の展望	35

# 1. 活動概要

## 1.1 委員の構成

2021年度のFD部会メンバーは、以下の6名の教員である。

2021年度FD部会委員名簿

氏名	所属	職	役割
廣瀬弘毅	経済学部	教授	委員長
新宮晋	経済学部	教授	委員
深尾武司	生物資源学部	准教授	委員
田中祐希	海洋生物資源学部	准教授	委員
坂口昌宏	看護福祉学部	准教授	委員
加藤裕美	学術教養センター	准教授	委員

## 1.2 事業の実施状況

### 1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より掲載する。

## 令和3年度 学生による授業評価の実施結果

(前期) 実施期間 令和3年7月9日(金)～8月9日(月) (ただし授業の都合等により一部期間外実施)

### 調査票対象・回答状況

<学部>			<大学院>		
	回答数	対象数		回答数	対象数
経済学部	1,656	4,710	経済・経営学研究科	19	34
生物資源学部	304	767	生物資源学研究科	48	56
海洋生物資源学部	469	1,148	看護福祉学研究科	0	0
看護福祉学部	805	1,738			
学術教養センター	1,722	3,947			
キャリアセンター	0	0			
計	4,956	12,310	計	67	90

### 参加教員

<学部>			<大学院>		
	実施人数	実施率		実施人数	実施率
経済学部	25 人	96.2 %	経済・経営学研究科	3 人	75.0 %
生物資源学部	17 人	100.0 %	生物資源学研究科	6 人	100.0 %
海洋生物資源学部	17 人	100.0 %	看護福祉学研究科	0 人	0.0 %
看護福祉学部	25 人	96.2 %	キャリアセンター他	0 人	0.0 %
学術教養センター	24 人	92.3 %	非常勤講師	0 人	0.0 %
キャリアセンター他	4 人	100.0 %			
非常勤講師	9 人	100.0 %			
計	121 人	96.8 %	計	9 人	90.0 %

### 参加科目

<学部>			<大学院>		
	実施科目	実施率		実施科目	実施率
経済学部	49 科目	94.2 %	経済・経営学研究科	3 科目	75.0 %
生物資源学部	20 科目	95.2 %	生物資源学研究科	6 科目	100.0 %
海洋生物資源学部	22 科目	91.7 %	看護福祉学研究科	0 科目	0.0 %
看護福祉学部	40 科目	95.2 %			
学術教養センター	89 科目	89.9 %			
キャリア教育科目	0 科目	0.0 %			
計	220 科目	92.4 %	計	9 科目	90.0 %

## 令和3年度 学生による授業評価の実施結果

(後期) 実施期間 令和3年12月13日(月)～1月31日(月)(ただし授業の都合等により一部期間外実施)

### 調査票対象・回答状況

<学部>			<大学院>		
	回答数	対象数		回答数	対象数
経済学部	1,061	3,918	経済・経営学研究科	14	44
生物資源学部	236	725	生物資源学研究科	6	14
海洋生物資源学部	126	598	看護福祉学研究科	0	0
看護福祉学部	406	1,707			
学術教養センター	1,218	2,673			
キャリアセンター	0	0			
計	3,047	9,621	計	20	58

### 参加教員

<学部>			<大学院>		
	実施人数	実施率		実施人数	実施率
経済学部	24 人	77.4 %	経済・経営学研究科	4 人	40.0 %
生物資源学部	18 人	100.0 %	生物資源学研究科	1 人	50.0 %
海洋生物資源学部	10 人	83.3 %	看護福祉学研究科	1 人	100.0 %
看護福祉学部	20 人	90.9 %	キャリアセンター他	0 人	0.0 %
学術教養センター	24 人	100.0 %	非常勤講師	0 人	0.0 %
キャリアセンター他	1 人	100.0 %			
非常勤講師	1 人	10.0 %			
計	98 人	83.1 %	計	6 人	15.8 %

### 参加科目

<学部>			<大学院>		
	実施科目	実施率		実施科目	実施率
経済学部	80 科目	72.1 %	経済・経営学研究科	7 科目	41.2 %
生物資源学部	20 科目	87.0 %	生物資源学研究科	1 科目	50.0 %
海洋生物資源学部	14 科目	82.4 %	看護福祉学研究科	0 科目	0.0 %
看護福祉学部	29 科目	72.5 %			
学術教養センター	71 科目	100.0 %			
キャリア教育科目	0 科目	0.0 %			
計	214 科目	81.7 %	計	8 科目	42.1 %

# 福井県立大学 授業に関する調査

本アンケートは以下の講義用です。アンケートに回答する前に確認してください：

学部名サンプル・講義名サンプル・教員名サンプル

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を御覧ください。

回答を1回に制限するためgmailアドレスでログインしてもらっていますが、誰が記入したのかは分からない設定になっています。教員にはアカウントは通知されませんので、このアンケートの回答が成績に影響することはありません。

**\*必須**

Q1 この講義（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組みましたか？ \*

- 1 意欲的に取り組まなかった
- 2 あまり意欲的に取り組まなかった
- 3 ある程度意欲的に取り組んだ
- 4 意欲的に取り組んだ

Q2 この授業についての方法（先生の講義の方法、話し方、資料の提示方法、学習支援システム・遠隔システムの活用など）はどうでしたか？ \*

- 1 不適切である
- 2 やや不適切である
- 3 まあまあ適切である
- 4 非常に適切である

Q3 この授業の内容はどの程度理解できましたか？ \*

- 1 理解できなかった
- 2 あまり理解できなかった
- 3 ある程度理解できた
- 4 理解できた

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか？ \*

- 1 高まらなかった
- 2 あまり高まらなかった
- 3 少し高まった
- 4 高まった

Q5 この授業を総合的に評価してください \*

- 1 良くない
- 2 あまり良くない
- 3 まずまず良い
- 4 良い

Q6 この授業について、その方法、教材、授業内容など、良かった点・悪かった点・気づいた点を自由に書いてください（この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します）。

回答を入力

---

Q7 教員設定の質問・選択式（該当授業のみ）

1

2

3

4

Q8 教員設定の質問・記述式（該当授業のみ）

回答を入力

リンクを取得

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

このフォームは 福井県立大学 内部で作成されました。 [不正行為の報告](#)

Google フォーム

## 全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。  
以下に、集計結果の見方を記す。

集計数	前期：回答された全てのアンケート 後期：回答された全てのアンケート
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差
集計方法	上段 回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1点、2点、3点、4点」と得点化。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を示す。 下段 設問ごとに母標準偏差を求め、回答者の選択肢に対する偏り度合いを数値で下段に示す。但し、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。 「—」の欄は有効回答が無かったことを示す。
[集計グループ]	
全体	全ての集計対象者
部局別	当該学部にも所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
履修登録者数別	履修登録者数が「100人以上」「100人未満」別に集計

令和3年度 前期 学生による授業評価全体集計結果

【学 部】

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 4956 )	3.37 0.69	3.39 0.68	3.19 0.67	3.26 0.76	3.45 0.67
部局別 ( 4956 )						
経済学部	( 1656 )	3.29 0.70	3.28 0.70	3.09 0.69	3.13 0.80	3.32 0.69
生物資源学部	( 304 )	3.21 0.73	3.28 0.68	3.12 0.70	3.15 0.78	3.39 0.65
海洋生物資源学部	( 469 )	3.31 0.75	3.37 0.72	3.19 0.75	3.23 0.80	3.40 0.76
看護福祉学部	( 805 )	3.52 0.63	3.40 0.70	3.20 0.62	3.40 0.71	3.49 0.66
学術教養センター	( 1722 )	3.42 0.67	3.52 0.62	3.30 0.63	3.33 0.71	3.58 0.59
規模別 ( 4956 )						
100人以上	( 1707 )	3.31 0.68	3.36 0.69	3.12 0.70	3.18 0.79	3.40 0.67
100人未満	( 3249 )	3.41 0.69	3.41 0.68	3.23 0.65	3.29 0.75	3.48 0.66

【大学院】

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 67 )	3.51 0.74	3.45 0.58	3.07 0.63	3.27 0.68	3.48 0.56
部局別 ( 67 )						
経済・経営学研究科	( 19 )	3.74 0.71	3.74 0.44	3.05 0.69	3.58 0.59	3.63 0.58
生物資源学研究科	( 48 )	3.42 0.73	3.33 0.59	3.08 0.61	3.15 0.68	3.42 0.53
看護福祉学研究科	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —

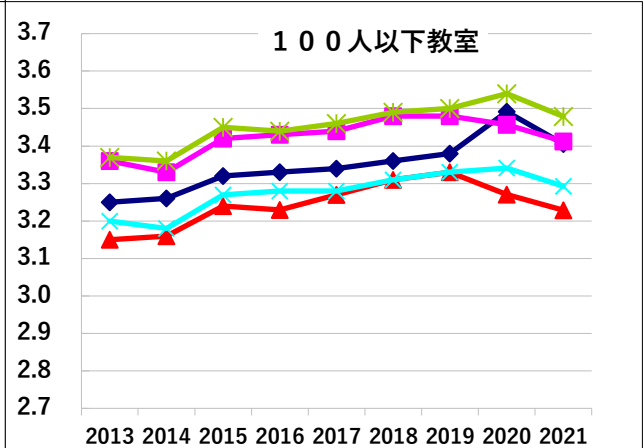
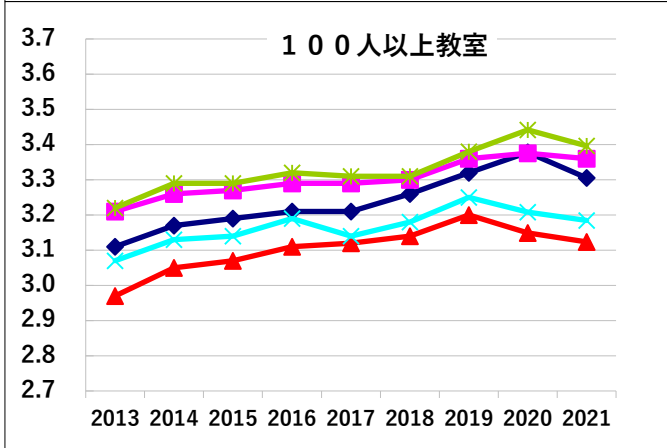
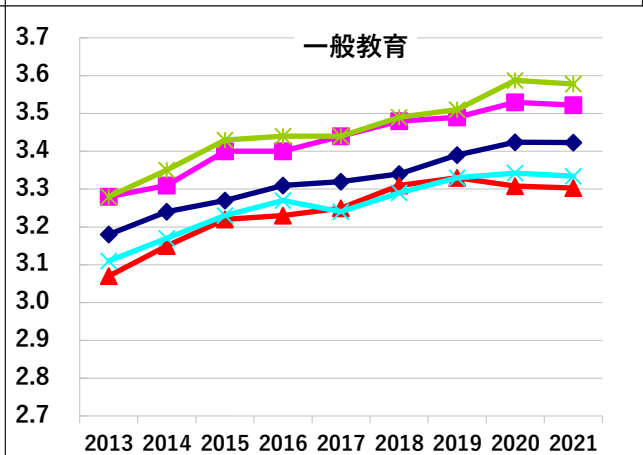
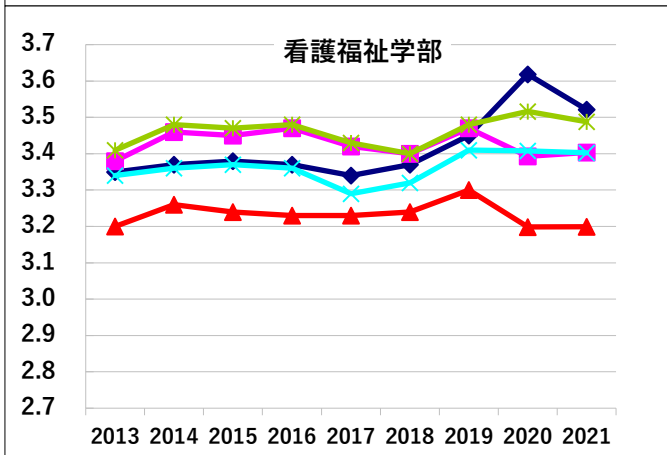
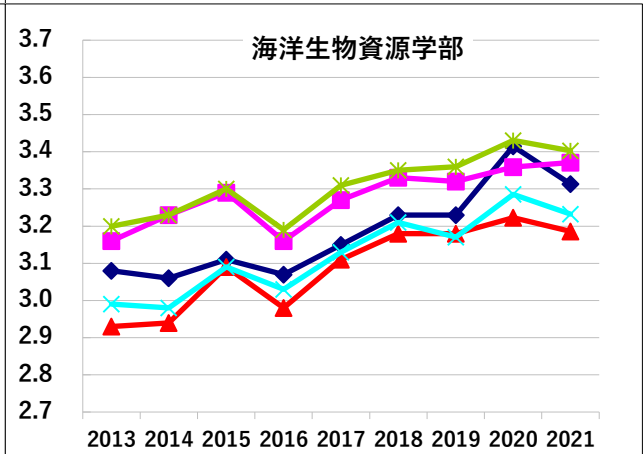
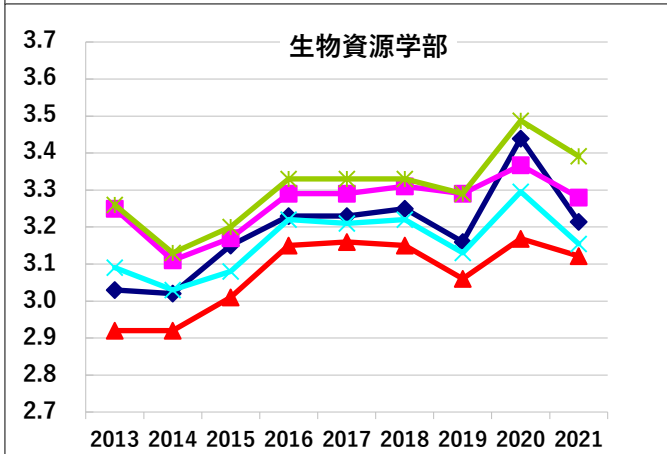
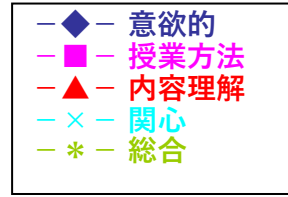
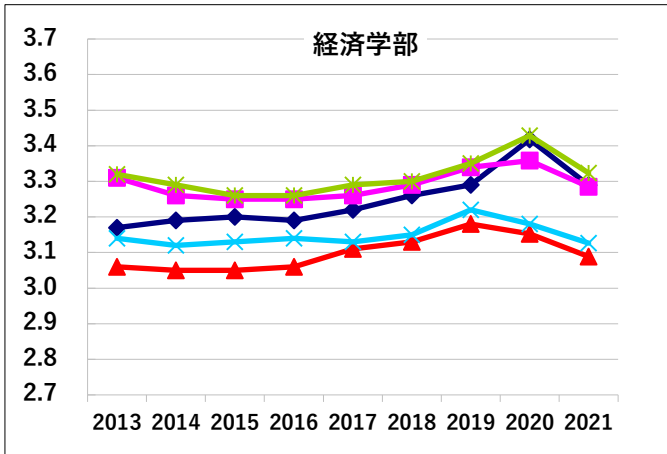
令和3年度 後期 学生による授業評価全体集計結果  
【学 部】

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 3047 )	3.41 0.67	3.44 0.64	3.26 0.64	3.31 0.73	3.51 0.64
部局別 ( 3047 )						
経済学部	( 1061 )	3.38 0.69	3.36 0.64	3.24 0.64	3.24 0.76	3.43 0.65
生物資源学部	( 236 )	3.37 0.66	3.39 0.60	3.14 0.62	3.21 0.73	3.44 0.66
海洋生物資源学部	( 126 )	3.36 0.68	3.21 0.81	3.20 0.73	3.14 0.86	3.27 0.83
看護福祉学部	( 406 )	3.52 0.64	3.54 0.64	3.29 0.60	3.49 0.62	3.62 0.61
学術教養センター	( 1218 )	3.42 0.66	3.52 0.61	3.31 0.65	3.34 0.70	3.58 0.60
規模別 ( 3047 )						
100人以上	( 811 )	3.27 0.69	3.26 0.68	3.06 0.65	3.04 0.79	3.29 0.68
100人未満	( 2236 )	3.46 0.66	3.51 0.61	3.33 0.63	3.41 0.68	3.59 0.61

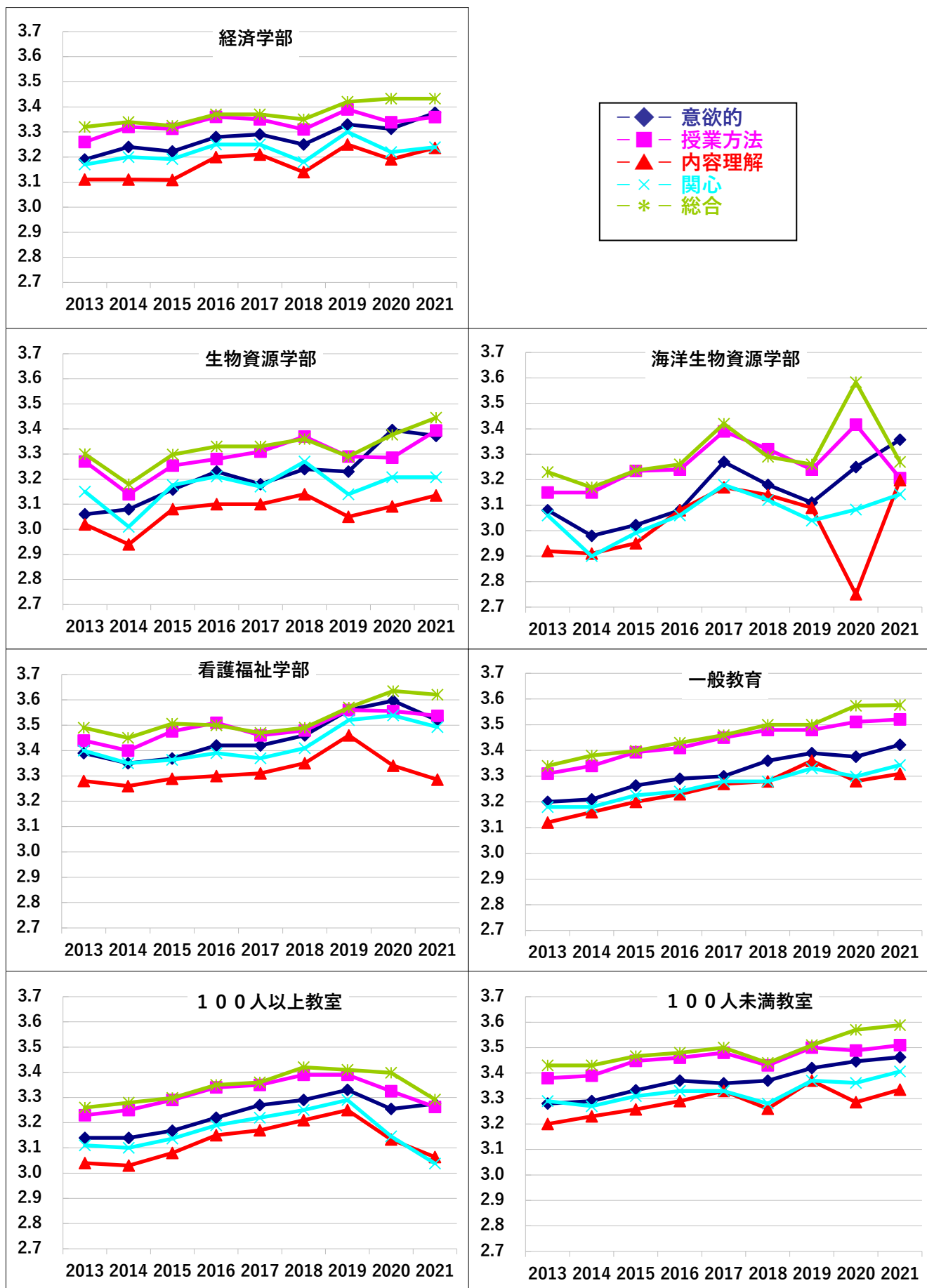
【大学院】

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 20 )	3.60 0.73	3.65 0.48	3.35 0.65	3.55 0.67	3.75 0.43
部局別 ( 20 )						
経済・経営学研究科	( 14 )	3.79 0.77	3.79 0.41	3.50 0.50	3.86 0.35	3.93 0.26
生物資源学研究科	( 6 )	3.17 0.37	3.33 0.47	3.00 0.82	2.83 0.69	3.33 0.47
看護福祉学研究科	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —

## 重要項目の経年特性（前期）



## 重要項目の経年特性（後期）



### 1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部署のFD活動」にて報告する。

### 1.2.3 FD研修

全体研修は令和3年度は実施せず。各部署で行った研修は、2章「各部署のFD活動」にて報告する。

### 1.2.4 実施要項

#### 福井県立大学学生による授業評価実施要項

- 1 目的  
学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。
- 2 対象教員  
専任教員および非常勤講師
- 3 対象学生  
学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生
- 4 対象授業  
(1) から (3) を除く授業科目  
ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。  
(1) オムニバス授業  
(2) 実験、実習(指導)、論文(指導)、研究、卒業研究、演習教科  
(3) 実施期間終了後の集中講義
- 5 期間  
前期科目： 前期 期末試験期間前の2週間  
後期科目、通年科目： 後期 期末試験期間前の2週間  
集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。
- 6 方法  
アンケート用紙にて実施する。  
ただし、事前の申請により、LMSにて実施することができる。
- 7 項目  
評価は、下記項目について実施する。  
(1) から (5) については、4段階評価とし、(6) については、自由記述とする。  
ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。  
  - (1) 受講の意欲
  - (2) 授業方法
  - (3) 内容の理解
  - (4) 関心
  - (5) 総合評価
  - (6) 感想等

## 8 評価結果の取扱い

評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびLMS実施データとともに部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。

評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。

## 9 評価結果の公開

- (1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内LAN内のウェブページにて公開する。

ただし、7（6）感想等の記載内容については、公開しない。

評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。

- (2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内LAN内のウェブページにて公開する。

### 【 附 則 】

平成26年 4月 1日 施行

平成27年 5月26日 改正（期間）

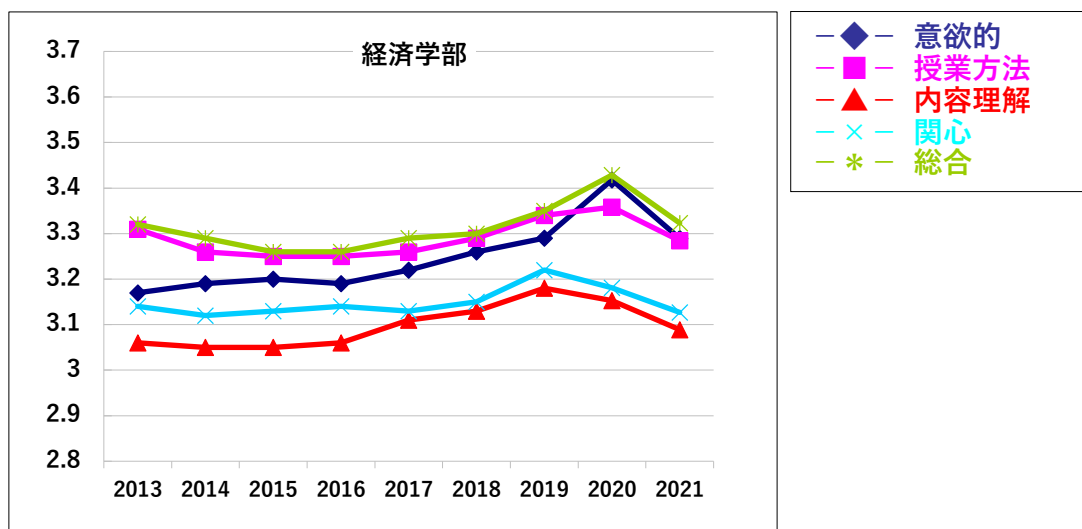
平成29年 6月 7日 改正（評価結果の取扱い）

## 2.1 経済学部（新宮晋）

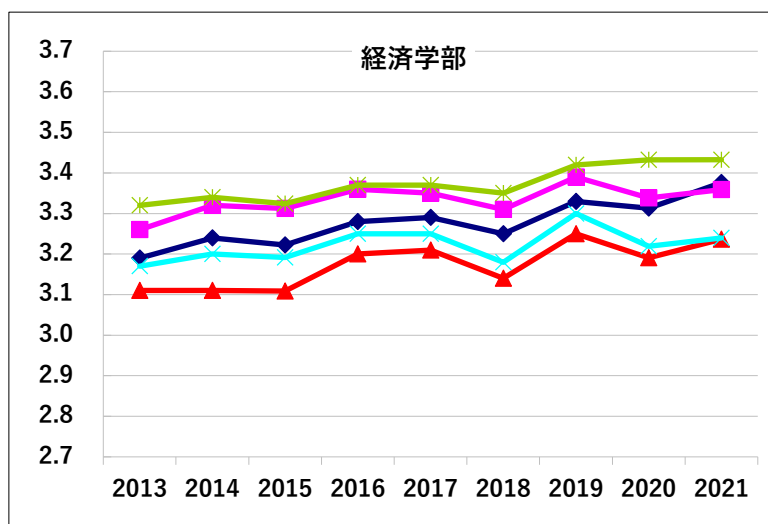
### 2.1.1 授業評価

継続するコロナ禍の中で2020年度から導入された遠隔授業は、短期間で一気に態勢が整った後も様々な試行錯誤を繰り返し、この2年間でレベルの高い状態で定着しつつあるように見える。ただ、授業方法として教員側の習熟度は高まってきたが、学生の受け止め方はどうだろうか。この点を中心に、授業評価アンケートを点検しておく。

[前期]



[後期]



2020年度は、上述のとおりコロナ対応の授業形態がスタートし、前期全面遠隔、後期前半も全面遠隔という中での授業であった。しかし今年度に入り、原則対面で遠隔は科目により併用というかたちになった。こうした授業形態の慌ただしい変化を反映してか、この2年間の授業評価は非常にアップダウンが激しい。遠隔授業が導入されて以来総合評価は総じ

て高いが、今年度前期は、他の評価項目共々下がっている。特に「内容理解」や「関心」に絞ってみれば、もともと低かったのが、この間さらに下がっている。これらについては、今後さらに立ち入った分析が必要になると思われる。

さしあたって気づいたことを確認しておく、確かに遠隔授業について教員サイドもテクニカルに習熟してきたとはいえ、授業のやり方としてはまだ不十分な可能性もある。例えば、遠隔授業の際にしばしば指摘される、一方での過重な課題や他方での評価方法の難しさ（試験やり方など）といった課題があることは、昨年度の報告書に引き続き、ここでも指摘しておきたい。

同時に、改めて対面授業の重要性が確認された面もあり、遠隔のノウハウについてスキルを向上させそのメリットを生かしつつも、対面での学生同士の直接的情報交換の可能性や対面でのオフィス・アワーをどう遠隔の中で実現していくかも課題といえよう。さらに、ゼミの運営は、そのなかでフィールドワークを行ったり、グループ研究の場としたりしているところもあり、これら対面でなければできないことは改めて言うまでもない。

新型コロナが収まれば、対面・遠隔のそれぞれのメリットを生かした授業形態が増えてくるものと思われるが、そのノウハウや授業改善の可能性は緒に就いたばかりで、しばらくは教員間の情報共有や受講生からの反応を見ながら、引き続き試行錯誤を続けていくことになろう。

### 2.1.2 授業公開

今年度、授業公開は2つの授業で実施された。

#### ①担当教員：藤野秀則

科目：演習 I & II

日時：11月30日（火）4限目・5限目

場所：共通講義棟 208号室（対面で実施）

備考：4年生6人が卒論研究の進捗を発表

#### ②担当教員：新宮晋

科目：マクロ経済学Ⅱ

日時：11月15日（月）1限目

場所：共通講義棟 108教室及び Zoom

備考：Zoom を利用した2教室併用授業のデモンストレーション

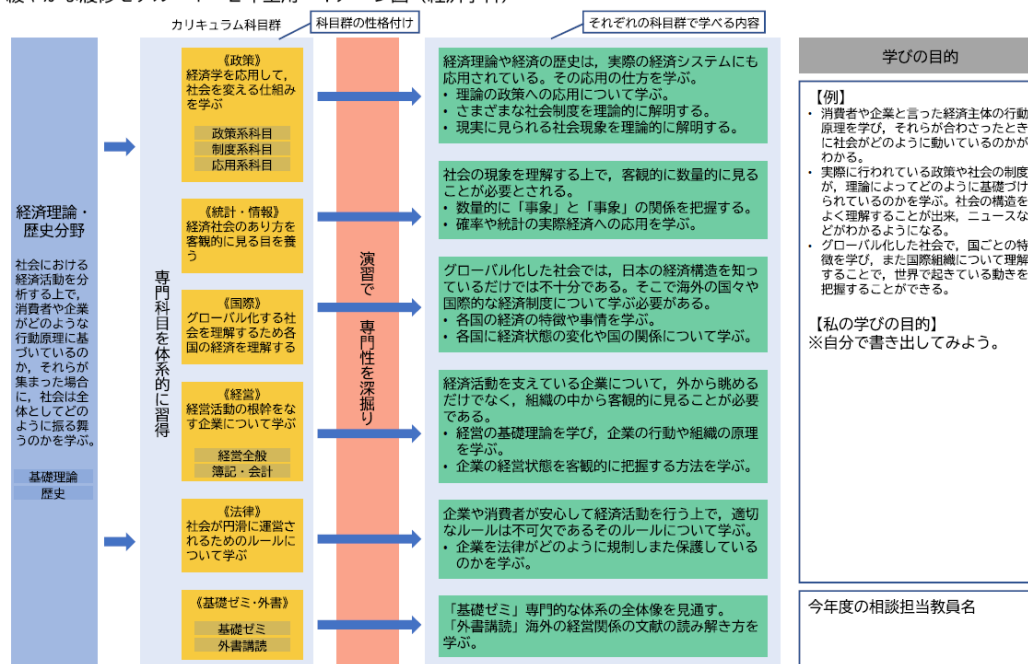
### 2.1.3 カリキュラムに関わる授業改善活動：「緩やかな履修モデル」の提示

経済学部では、学部全員で、あるいは学科に分かれて、定期的に懇談会を開催し、学部や学科の課題全般について議論している。それらの中で、前々学部長（北川学部長）の発案と

問題提起を受け、各学科の授業間の関連性についてもっと学生に周知し、体系的な学修を促す必要性について、このかん議論を重ねてきた。個々の授業改善にとどまらない授業改善の試みといえる。カリキュラムとして体系化されたものが学生に理解されておらず、そのため学生にとってはたんなる単位取得ゲームのような様相を呈しており、そのことがせつかくの履修による学修効果を一定程度削いでいるという認識が共有されるようになってきた。

こうした現状認識を踏まえ、そこにゴール・イメージも重ねて「緩やかな履修モデル」として纏めた結果を、広義の授業改善活動として提示したものが、図1・図2である。ここではサンプルとして、「緩やかな履修モデル 1・2年生用（経済学科）」と「緩やかな履修モデル 3・4年生用（経営学科）」を示しておく。

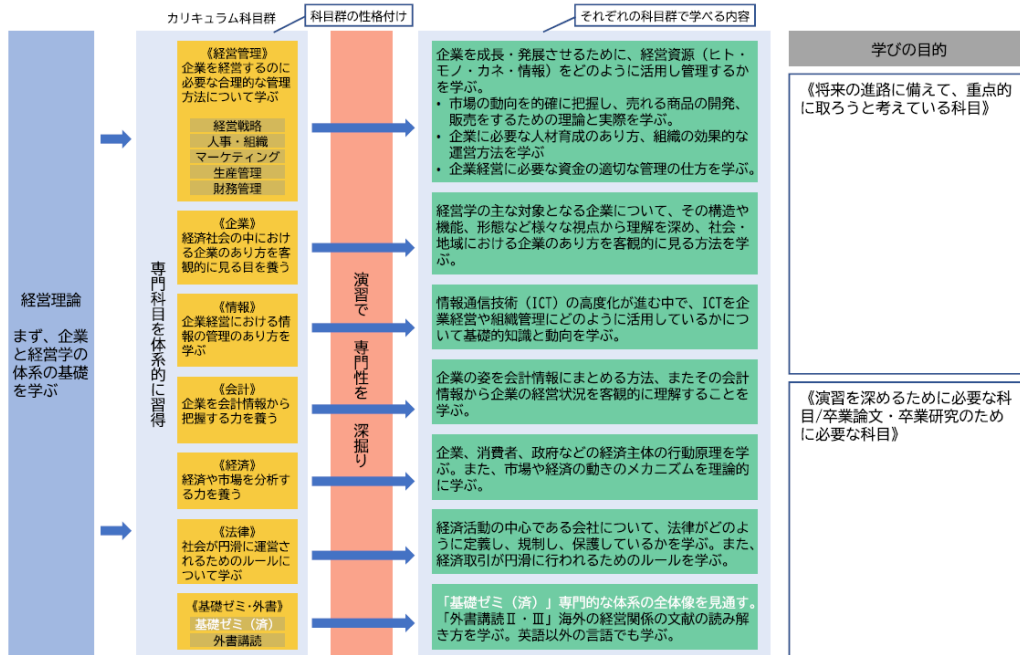
緩やかな履修モデル 1・2年生用 イメージ図（経済学科）



※履修上の注意

- ・大学の4年間で、どんなことを学ぶのか、それぞれの学問体系を俯瞰して考えてみて下さい。
- ・今学期・今年度に履修予定の科目（群）で、どういったことを学ぶのか、考えて登録しましょう。
- ・それぞれの科目ごとの履修概要・目的は、シラバスに記載されています。必ず確認しましょう。

緩やかな履修モデル 3・4年生用 イメージ図（経営学科）



※履修上の注意

- ・大学の4年間で、どんなことを学ぶのか、それぞれの学問体系を俯瞰して考えてみて下さい。
- ・今学期・今年度に履修予定の科目（群）で、どういったことを学ぶのか、考えて登録しましょう。それぞれの科目ごとの履修概要・目的は、シラバスに記載されています。必ず確認しましょう。

本学部ではこれらを履修指導に生かすことを考えており、それぞれの学年の相談担当教員が対応する。履修指導といえば、未履修科目の多い学生向けに卒業に向けた指導が多かったが、ここに提示するモデルを通じて、目標や関心に合わせた学修へと誘導することを意図している。そしてそれを通じて科目間の連関を意識させ、より深くより高い次元での授業理解に資することを目指すものである。これまでの試行版を通じて練り上げてきたものを、新年度に最終版として出すものであるが、引き続き検討を続け、時に応じて改訂していくことにしている。

## 2.1.4 授業改善に関わる目下の取り組みと課題

経済学や経営学は、一方でディシプリンとして確定した体系を持ちつつ、他方で時代に寄り添って変化している部分を持つ。実際には体系自体も学問の発展につれて変化していくが、逆に時代をさかのぼって再評価し見直すことも多々ある。それが社会科学の一分野である経済学・経営学の特徴といえよう。それだけに、時代をにらみながら絶えずカリキュラムに目配りする必要がある。

これについては、本学部の年齢構成からくる教員の交替を機にカリキュラムの更新を適切に行うことで、学生に対しより効果的な学修が提供できることを目指している。それはま

た、「緩やかな履修モデル」のコンセプトでもある、科目間の連関を通じたより良い授業理解を目指すことにも繋がる。

他方で、教育手法の進化や変化は、同じことを学生に理解させるのにかつてとは違う方法をとる必要が出てくる場合もある。これらは、高い抽象化の能力や現実への強い関心を前提に大学教育を行うことが必ずしも当然ではない、つまりこの前提に依存できないことへの対応でもある。

経済学部では、教育手法の変化や学生のこれまでの学修経験の変化に対応し、フィールドワークやデータ分析をより意識した学修を進めることを考えている。これについては、個々の科目内で引き続き継続しつつ、他方で特定のコースを設け、少数精鋭での実施を予定にしている。ただそれも、常に試行錯誤的に行われるべきで、真に授業改善に繋がるかどうかを検証しながら進めて行くことになる。

経済学部としては、個別の授業評価にとどまらず、こうした大局的な観点から授業改善を今後も進めていく必要があると考えている。

## 2.2 生物資源学部

### 2.2.1 授業評価

学部の授業評価結果は、昨年度と比較して、前期の「意欲的受講」が 0.27 ポイント減少したものの、他の面では前後期とも昨年とほぼ同様の結果となった。昨年度は前期すべてがオンライン講義、後期は半分程度がオンライン講義であった。本年度は、前後期ともほぼすべてが対面講義であった。前期の「意欲的受講」が減少したのは、オンラインから対面へと変化したことに起因するかもしれない。

近年 10 年間において、生物資源学部の授業評価は、どの評価項目においても、一般教育、経済学部、看護福祉学部の授業評価より低い傾向にある。これにより、生物資源学部のスコアは、毎年、全学部平均より低い。一般に、理系科目のスコアは、文系科目に比べて低くなる傾向にあるため、生物資源学部のスコアが全体と比較して低いのは、その専門科目の内容に原因があるのかもしれない。

令和 3 年度 学生による授業評価全体集計結果（学部生）

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価
前期	全体	4956	3.37 (-0.08)	3.39 (-0.04)	3.19 (-0.04)	3.26 (-0.03)	3.45 (-0.05)
	生物資源	304	3.21 (-0.23)	3.28 (-0.09)	3.12 (-0.05)	3.15 (-0.15)	3.39 (-0.10)
後期	全体	3047	3.41 (0.03)	3.44 (0.00)	3.26 (0.02)	3.31 (0.02)	3.51 (0.00)
	生物資源	304	3.37 (-0.03)	3.39 (0.10)	3.14 (0.05)	3.21 (0.00)	3.44 (0.06)

( ) 内は、昨年度との差（今年度 - 昨年度）。

大学院の授業評価結果については、昨年度と比較して、前期では「意欲的受講」が 0.28 ポイント増加し、「講義への関心」は 0.28 ポイント減少した。後期では、「授業方法」と「総合評価」が共に 0.33 ポイント増加したものの、「内容理解」が 0.5 ポイント減少した。

前期においては、生物資源学研究科の授業評価と全学平均のそれとの間に大きな差は見られなかった。しかし、後期においては、すべての評価項目において、生物資源学研究科のスコアが全学平均と比べて 0.3 ポイント以上低い結果となった。特に、「意欲的受講」と「講義への関心」については、顕著な差が見られた。これは、後期の集計数が前期と比較して非常に少ないことに起因すると思われる。

令和3年度 学生による授業評価全体集計結果 (大学院生)

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業方法	Q3 内容理解	Q4 関心	Q5 総合評価
前期	全体	67	3.51 (0.37)	3.45 (0.02)	3.07 (0.07)	3.27 (-0.16)	3.48 (-0.09)
	生物資源	48	3.42 (0.28)	3.33 (-0.10)	3.08 (0.08)	3.15 (-0.28)	3.42 (-0.15)
後期	全体	20	3.60 (0.27)	3.65 (0.65)	3.35 (-0.15)	3.55 (0.72)	3.75 (0.75)
	生物資源	6	3.17 (-0.16)	3.33 (0.33)	3.00 (-0.50)	2.83 (0.00)	3.33 (0.33)

( ) 内は、昨年度との差 (今年度 - 昨年度)。

## 2.2.2 授業公開の方針と実績

### (1) 方針

生物資源学部では、各教員が必要に応じて学部内の教員の講義を聴講し、授業内容を直接確認できるよう全講義を対照に「随時公開制」を採用してきた。しかし、公開授業を指定しない状態では、授業参観に参加する教員も少ないため、今年度からは、毎年、1 - 2科目を授業公開の対象科目として選定し希望者が参加できる形式とした。

公開授業の選定については、以下の項目を選定基準としている。1) 授業評価において学生から高い評価を受けた授業、2) 効果的でユニークな教育手法を取りいれている授業、3) 他大学も含め講義経験が浅い教員の授業。

公開授業の直後、担当教員と参加教員によるミーティングを実施している。ここでは、対象講義に関するフィードバックについて議論したり、自身の講義における工夫や効果的な教授法に関する意見交換を行い、学部全体の教育の質のレベルアップに努めている。

### (2) 実績

今年度は、キャリアを通して初の講義を担当する西嶋助教の「生物学 II」を公開講義に選定し、授業参観と意見交換会を実施した。

公開科目： 「生物学 II」

実施日時： 2021年10月22日 2限 (10:40-12:10)

場 所： 通講義室棟 L112

講義概要： これまでに発見された植物ホルモンの機能や利用について

意見交換会： 同日、12：10-13：10

場 所： 生物資源学部棟 1F 会議室

参 加 者： 11名（教授5名、准教授3名、講師1名、助教2名）

今回の公開講義および意見交換会では、生物資源学部の約 1/3 に当たる 11 名の教員が参加した。公開講義において、参加者には、講義における強み、改善点、感想などを記入する評価シートが配布され、講義後のミーティングでは、評価シートをもとに講義に関する意見交換がなされた。また、参加者それぞれが自身の講義で実施している効果的な教授法や工夫などについても話し合われた。今回の意見交換会では、公開講座の担当教員だけでなく、参加者それぞれが日々の講義での疑問や困りごとなどを相談することができた。今後も、公開講義と意見交換会は、年 1-2 回の頻度で継続していき、学部全体の教育の質の底上げを実現させたい。

### 2.2.3 授業改善活動についての課題と展望

昨年（2020 年）度はオンライン講義元年であり、方法論の確立やオンラインツールの使用法の習得などで、とまどうことも少なからずあった。今年（2021 年）度は 2 年目ということもあり、オンライン講義の回数は少なかったものの、よりスムーズな講義が実施できた。また、対面講義においても、Google Classroom を用いた資料配布、テストやクイズの実施、成績管理が行われ、ZOOM を用いたハイブリッド講義も提供されるなど、コロナ前では出来なかった講義活動が行われた。生物資源学部は理系学部であり、オンラインツールの習得にも抵抗なく、積極的に取り入れる教員が多い。また、講義の受け手である学生からの評価においても、これらのオンラインツールの有用性を指摘する意見が多く、これからも継続利用していければと考えている。

生物資源学部では、前期で 95.2%、後期で 87% の学部講義で授業評価アンケートが実施された。前後期とも全学平均より高い実施率であり、各教員の FD 活動への理解が反映された結果であると考えている。しかし、大学院においては、前期の実施率が 100% であるのに対し、後期では 50% であった。これは後期の授業評価の対象となった科目が 2 科目しかなく、そのうち一方でアンケートが実施されなかったことによる。生物資源学部では、大学院における授業評価アンケートの実施率が、毎年、低い傾向にあったが、今年度は大幅に実施率が改善された。今後も、授業評価アンケートの実施時期や手法の周知を徹底し、高い実施率を維持・上昇させていきたい。

今年度は、最近実施されてこなかった公開講座への授業参観を再開し、直後に意見交換会を開催した。これには、生物資源学部の教員の 1/3 が出席し、講義活動に関する工夫や問題点、解決法などが活発に議論された。対象の公開講座に関してのみならず、参加者全員のそれぞれの講義に関する議論ができ、効果的な教授法や試験方式について知ることができた。今後もこの活動を定期的に継続し、学部全体の講義の質向上に役立てていきたい。

## 2.3 海洋生物資源学部（田中祐希）

### 2.3.1 授業評価アンケート

海洋生物資源学部における 2021 年度の授業評価アンケートの実施科目数は前期が 20、後期が 14 であった。受講者が少人数（概ね 5 人以下）の科目やオムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目を除き、ほぼ全ての科目で実施された。また、多くの教員は学生からの自由記述に対して具体的な改善方法を提示するなど丁寧なコメントを公表していた。

アンケート結果の経年変動を見ると（10, 11 ページの全体集計結果の図のうち海洋生物資源学部のパネルを参照）、本学部の講義に対する評価は概ね上昇傾向にあり、2021 年度にはアンケート開始以来初めて、全評価項目の平均で前期・後期ともに学部平均で 3.23 以上となった（ほぼ全ての授業がオンラインとなった 2020 年度を除く）。各教員の努力の表れと捉えられよう。一方で他学部との比較では、前期は全ての項目でほぼ全学平均と同程度であったものの、後期ではやや下回っている項目が多く（図 1）、本学部の講義にもまだ改善の余地が残されていることが示唆される。

評価値の標準偏差は、例えば総合評価の項目で前期 0.76、後期 0.83 と、特に後期において全学平均よりもやや大きい傾向にあり、学生間で評価にバラつきがあることがわかる。理系科目において、受講者各人の理解度に（したがって満足度にも）差が出てしまうのはある程度やむを得ない部分もあるが、高い評価を与えた学生の満足度をそのままに保ちながら、低い評価となってしまった学生の満足度を上げることができれば、全体としての評価がさらに向上するものと期待される。

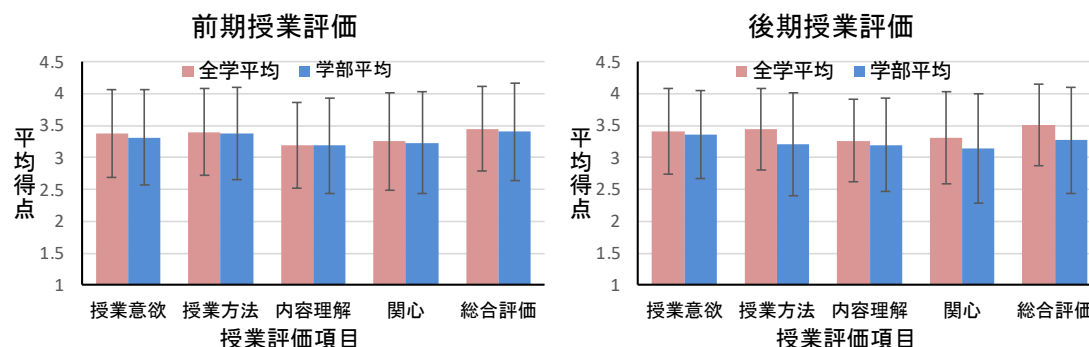


図 1: 2021 年度前期および後期の海洋生物資源学部における授業評価アンケートの結果。各項目に付されたバーは標準偏差を表す。

アンケート結果を講義科目間で（あるいは学部間や年度間で）比較する際には細心の注意が必要であることは言うまでもない。特に理系の基礎科目においては、実際に自らが研究の現場で使用してその重要性・有用性を実感しない限り、学習する意義をなかなか理解しづらい性質の科目も数多く存在する。その意味で、アンケート結果だけが講義の評価基準ではないことには十分配慮しつつ、引き続きより効果的かつ魅力的な講義を展開できるよう学部全教員で協力して取り組んでいきたい。

### 2.3.2 学生アンケート

2021 年度に実施された学生アンケートのうち、FD 部会に関わる要望と回答をピックアップする。

学生からの要望	FD 委員からの回答
授業評価アンケートは全ての授業で実施してほしい。（3 年次生）	現在のルールでは、「人数が極端に少ない科目」、「オムニバス科目」を除いて実施しています。後者についてはアンケートを実施することも可能ですので、ルールの変更が必要か FD 部会で検討します。

授業評価アンケートがどのように先生方に反映されているのか気になる。(3、4年次生)

アンケートの結果は各教員に知らされており、それを受けて各教員の判断で必要な改善を行っています。

2.3.1で扱った授業評価アンケートに対する要望が数件寄せられた。アンケート結果に対する教員からのコメントは大学ホームページ上で公開されていることを学生により積極的に周知するとともに、アンケート結果を受けた講義内容の改善もより学生が実感できるような形で進めていきたい。また、授業評価アンケートの実施対象科目については引き続き検討が必要と思われる。

### 2.3.3 授業公開

#### (1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者と意見交換することを通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会を提供することを目的とする。授業公開は大学教育における画一的な模範授業を目指すものではなく、教育の自由が保障される中で、個々の授業内容に合わせたより特色のある効果的な授業を継続的に育むためのものである。そのため、授業内容について非建設的な批判を行うのではなく、講義に対する互いのスタンスを尊重しながら、特に授業方法について教員同士が学び合うことを趣旨としている。

#### (2) 実績

2021年度には後期に一回の授業公開を実施した。参加教員数が本学部教員29名中6名とやや少なく、次年度以降はより積極的に参加を呼びかけ、授業改善の有効な場となるよう努める必要がある。

本年度の授業公開は、兼田淳史教授が主に二年次生に対して開講している「沿岸海洋学」を対象として12月に開催された。遠隔講義から対面講義に戻り、各教員がその効果的な実施方法について模索している段階での開催となった。また、本講義の主な対象である二年次生は入学以来ずっと遠隔講義が主体となっていた学年であり、大学での対面講義にまだ十分に慣れていない状況であった。

そのような状況下で、学生から毎年高い評価を受けている兼田教授の「沿岸海洋学」ではどのようにしてスムーズな講義進行を実現しているのか、また、学生の知的欲求を満たし、主体的な学習を促すためにどのような工夫がなされているのかを知り、自らの講義へとフィードバックする機会と位置付けて授業公開を実施した。

公開科目名：沿岸海洋学（二年次生対象・選択科目）

担当教員：兼田淳史 教授

公開日時：2021年12月20日（月）

・授業見学：10:40～12:10

参観教員は感想や質問などを記録

・検討会：12:10～13:00

参観教員の感想をもとに意見交換を行う

会場：小浜キャンパス 多目的ホール（講義）、104セミナー室（検討会）

参加者：6名（片岡、佐藤晋、水田、山田、吉川、田中）

講義内容の概要は以下の通りであった。

- ・スライドと板書の併用スタイル
- ・前回の復習：
  - 中規模渦、暖水渦、冷水渦
  - 衛星海面高度
  - 潮位への影響、漁場域への影響
- ・今回の内容（吹送流）：
- ・板書で概要を説明

- ・慣性周期と比べた風の時間スケールによって、地球自転の効き方が変わる（長いと自転効果が重要になってくる）。
- ・短時間の風に対する湾内の応答：風下向きの流れ
- ・長い時間の風に対する海洋の応答：
  - － ナンセンの観測例：海面では風下に対して右 45 度の向きの流れ
  - － 流れは深さとともに右回りのらせんを描きながら減衰
  - － 風の影響が及ぶ範囲をエクマン層という
  - － 海面から全て足し合わせると風下に対して直角右向きの輸送
- ・エクマンによる理論的な説明
- ・水槽実験の動画
- ・開けた湾内における現場観測の例（フロリダ半島沖）：
  - － 風が岸に対して平行なときの方が直角向きのときより水位変化が大きい。
  - － 特に岸を右に見る風のときに沿岸水位が上がる。
- ・動画を見せながら振り返り

検討会で出された主な質問・コメントは以下の通りであった。

- ・前回授業の復習から始まる点が良かった。
- ・Power Point の資料で、板書する部分はあえて空欄にしてあるのか？
  - － イエス。あえて空欄にして、学生にノートを取らせるようにしている。自分の手で書くことは理解を深めるために重要と考える。
- ・概要を Power Point の資料で示すのではなく板書する点が良い。
- ・授業一回分のトピックの分量がちょうど良いように感じた。
- ・英語の動画はあえてそのまま流しているのか？
  - － イエス。優秀な学生のためにもそうしている。英語で発展的な内容を見せることで、さらなる自発的な学習を促したい。
- ・理論を解説するだけでなく、観測例の紹介も含まれている点がわかりやすい。
  - － なるべく多くの学生に興味を持ってもらえるよう、できる限り沿岸域の観測例とセットで解説するように心がけている。
  - － 対面講義に戻ってしばらくたち、最近ようやく学生から質問が出るようになってきた。

全体を通じて、これまで海洋の物理的な現象にあまり馴染みのない学生にも理解してもらえるような工夫（観測例を示すなど）と、より高度な内容を期待する学生が満足できるような工夫（英語の動画を見せるなど）が両立されている点が、多くの教員にとって印象的に映ったように感じられた。

### 2.3.4 授業改善についての課題と展望

海洋生物資源学部における今後のFD活動方針

2022 年度からは海洋生物資源学科、先端増養殖科学科の二学科体制が本格的に始動し、より多彩な講義科目が開講される予定である。また、新任教員も増えることが予想される。この機会に、各教員の講義をより魅力的かつ効果的なものとするために、年二回程度（前期・後期に一回ずつ）、授業公開を実施したい。新任教員の方にも積極的に参加してもらい、在任教員との間で自由に意見交換できる機会となるよう努める。こうした教員間の相互作用を通じて、各教員が自らの専門や背景を活かした特色ある講義について考える契機になればと考えている。

また、授業公開のうち少なくとも一回は前年度までの授業評価アンケートで高い評価を受けた授業とすることで、授業評価アンケートのフィードバックを通じた教育の質の向上を目指す。

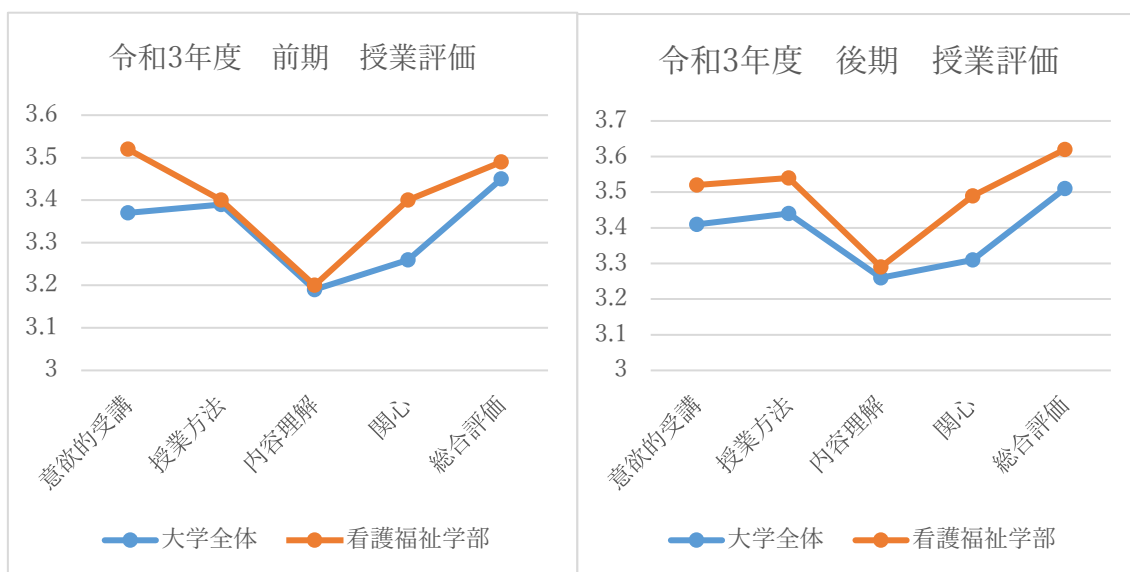
## 2.4 看護福祉学部

今年度は、昨年度に引き続き、授業評価アンケートについては新型コロナ感染により前期・後期ともにオンラインによる質問紙調査を行った。その際に、大学として学科名を問う項目を削除することとなったため、学部全体としての結果を報告する。また、ほとんどの教員が昨年度から遠隔授業を実施していることから、遠隔授業に関する実態調査も実施した。

これらのデータを基に授業評価（2.4.1）ならびに調査結果（2.4.2）、授業公開（2.4.3）、授業改善の取り組みと今後の課題と展望（2.4.4）を報告する。

### 2.4.1 授業評価

2021年度の前期は、基本的には対面授業を実施し、コロナ感染状況に応じて遠隔授業に変更するなど対応してきた。後期は1月共通テストの実施を考慮して一時期だけ、遠隔授業であった。下図は学部と大学全体を比較した授業評価である。



看護福祉学部の前期授業評価は「意欲的受講」、「授業方法」、「内容理解」、「関心」、「総合評価」のすべての項目で、大学全体の評価よりやや高い得点であった。また後期も同様に全項目で評価が高い傾向を示した。各評価項目の比較をみると、「意欲的受講」が前期・後期ともに3.52と大学全体の評価よりも0.1以上高かった。「授業方法」については、前期よりも後期が0.14高く、後期は大学全体よりも0.1高かった。「内容理解」は、前期より後期が0.9高く、後期では大学全体よりも0.03とわずかに高い結果となった。「関心」の項目では、前期より後期が0.09高く、後期では大学全体よりも0.18とかなり高い得点を示した。「総合評価」においては、前期より後期が0.13高く、後期では大学全体よりも0.11高い結果となっている。

前期と後期では評価対象科目が異なっており、単純にその比較はできないものの、全体的に前期より後期の評価が高い傾向を示した。その背景には、学生の「意欲的受講」は前期・後期ともに変わらないことから、前期は新型コロナ感染拡大に伴い、対面授業と遠隔授業を感染状況に合わせて臨機応変に行ってきたことが、受講生の評価として「授業方法」が統一できず、後期に比べて「内容理解」、「関心」を高めることができなかつたと考えられる。

また、このような結果から、2020年度から始まった遠隔授業を活用した授業形態は定着してきたものの、意欲的に授業に取り組む学生にとって、専門的な知識や技術を身に着けるための「内容理解」とともに、専門領域への学修を深めるための「関心」を高めるための授業方法をどのように実施していくか検討していく必要があるのではないだろうか。

#### 2.4.2 遠隔授業に関する実態調査

2020年度から遠隔授業が本格的に実施されているため、ほとんどの看護福祉学部教員が対面と遠隔の講義方法を経験した。そこで、年度末に学部教員に遠隔授業（ハイブリットでの講義も含め）に関するアンケートを実施し、その結果を以下に報告する。

##### ①調査方法

2022年4月中旬に2022年度に在籍している看護福祉学部専任教員にGoogle formによるオンライン調査を実施した。

##### 【主な調査内容】

担当した授業科目の種類（講義・演習・実習）、遠隔授業で利用した授業方法、課題提示やレポート提出等に使用した授業サポート、成績評価の方法、出欠の確認方法、遠隔授業の利点・欠点、今後の課題など選択式の回答と自由記述で構成した8問を設定した。

##### ②調査結果

25名から回答を得た（回収率58%）

回答者が担当している科目は、講義科目が24名、演習科目19名、実習科目19名であった（複数回答）。最も利用した授業はZoomを利用した双方向オンライン型のライブ授業が100%を占めた（複数回答）。

授業で活用した授業サポートはGoogle Classroomが17名、LMSが11名、その他が3名であった（複数回答）。

成績評価の方法は、自由記述での回答を得て、レポート課題による評価が最も多く、アクションペーパー、ミニレポート、小テスト等が活用されていた。

学生の授業参加の出欠の確認方法は、自由記述での回答を得て、Zoomでのチャットに出席入力、少人数クラスでは授業始めにビデオをオンにしてみよう、LMSのコメント、グループクラスルームへのコメント、小テスト、簡易レポートなどがあつた。

遠隔授業の利点に関する自由記述は23名から回答を得た。主な内容は教育効果と学習効果・講義環境、学生の感染・天候不良等へリスクの安全性・負担軽減、講義担当者に分類できた。それぞれの利点について以下に示した。

#### 《教育効果としての利点》

- ・東京で活動している専門家や移動の困難な障害当事者といった今までゲストスピーカー等が困難な人にも話をしてもらうことができる。
- ・少人数のクラスではグループワークや、教員と学生1対1の話し合い（相談）などがしやすいと思いました。プレゼンテーションも、学生自身が共有して発表できるのでやりやすかったです。ペーパーレスで授業ができたこともよかったです。

#### 《学習効果・講義環境としての利点》

- ・録画しておいてオンデマンドで見てもらえる。
- ・出席率が高い、画面を共有したプレゼンを実施しやすい。
- ・遅刻、欠席が減った。学生が確実に参加していれば、理解度は対面と遜色ないと思う。頻回なりアクションペーパーなどにより学生の意外な一面や心理状態を把握することができたように思う。
- ・遅刻した学生が入室しても全体の授業の流れがとまらない。
- ・録画配信であれば、聞き逃したところや分からなかったところを繰り返し学修できること
- ・パワーポイントなどの画面が学生の手元でみることができるので、スライドが見えない（見にくい）ということが少ない。
- ・画面で資料を共有できるので学生の「見にくい」がないこと

#### 《学生の感染リスクや負担軽減に関する利点》

- ・感染防止だけでなく、天候不良時（台風、豪雪）に移動の危険なく授業が継続できる。大雪など、交通障害が予測される時に移動をさせないことで、学生の安全と授業時間確保が可能となる。
- ・コロナ禍での授業の継続性
- ・天候不順時でも授業できる、体調等に不安がある学生も出席できる
- ・感染予防、大学以外の場所から講義ができる（出張時など）、学生の顔が分かる（マスクをしていないので）

#### 《講義担当者としての利点》

- ・在宅勤務で、①仕事と家庭の両立が図りやすい、②訪問や電話によるジャマが入らないため仕事ははかどる、③落ち着いて仕事ができる、④心身の疲労が少ない。
- ・配布資料を印刷しないので講義準備が楽になった。
- ・研究活動の活性化（研究活動のための出張に支障をきたさないため）
- ・教員は研究室や在宅で授業ができ、学生も在宅や職場（院生の場合）で授業を受ける

ことができ移動の時間が削減できる

- ・在宅ワークが進む

次に、遠隔授業の欠点に関する自由記述は 23 名から回答を得た。主な内容は、《学生の反応やモチベーションなど把握しにくい》が昨年度に引き続き、圧倒的に多かった。その他、《グループセッションの限界》、《演習によるスキル評価の困難さとその効果の低さ》、《提示できる授業媒体の限界と学習環境の不備》、《遠隔授業上の環境整備の困難さ》、《一方通行授業による孤独感》などがあった。また昨年度は、《教員の負担》が欠点として意見が出ていたが、今年度はそれに該当する回答はなかった。以下に具体的な意見の抜粋を示す。

#### 《学生の反応やモチベーションなど把握しにくい》

- ・授業中の学生の反応が分からない。
- ・学生の授業への意欲が目に見えない。
- ・講義について、モチベーションの低い学生（Zoom には入っているが、講義を視聴していない等）への対応方法が難しい。
- ・リアクションが分かりにくい、単調になりやすい。
- ・人数の多い講義はカメラオフなので学生の反応（理解しているか）の確認ができない。
- ・学生の反応が見えない。通信の関係でカメラをオフにするため、授業中に学生が画面の前にいるかがわからず、本当に本人が参加しているかはわからない。

#### 《グループセッションの限界》

- ・グループワークがスムーズに行えない。
- ・ワークショップ等の演習に工夫が必要である。
- ・学生同士の意見交換やコミュニケーションが難しい。
- ・2020 年度は大人数のクラスでもリモート授業だったのですが、ブレイクアウトで話し合うときに、違う話をしていたりするグループがあって困りました。大人数の場合はグループワークしにくかったです。
- ・ブレイクアウトルームでのディスカッションの様子がわからない。

#### 《演習によるスキル評価の困難さとその効果の低さ》

- ・対人関係形成が困難となる。
- ・知識定着には遠隔授業でもよいが、援助技術の向上を評価することは難しい。
- ・視聴覚以外の感覚も活用する対面での交流の機会を保證せず、遠隔授業のみにするのが、最も大きなデメリットでしょう。
- ・演習（ロールプレイなどノンバーバルなコミュニケーション技能を扱う講義）には向かない。
- ・教員、学生の双方向・相互作用が弱まる。

#### 《提示できる授業媒体の限界と学習環境の不備》

- ・モデルなどの実物を見せることができない。
- ・著作権を侵害していないか心配である。

#### 《遠隔授業上の環境整備の困難さ》

- ・電波の不具合で発信・参加できないときがある。
- ・通信不安定なことが多い、そのため、アクティブラーニングは困難である。

#### 《一方通行授業による孤独感》

- ・対面授業でのちょっとした学生・教員間の雑談などができないため、ゆとりや授業内容以外のかかわりの時間が発生しない。
- ・双方向のシステムを使いながらも、講義の場合は学生の反応が分からず一方的に進めがちである。

遠隔授業に対する課題について 20 名から回答を得た。

今後の課題として、対面授業と遠隔授業とのハイブリット（対面から遠隔への切り替え、対面と遠隔の同時進行）に関して、対面の代替としての遠隔授業ではなく、遠隔授業の利点を活かした講義にできないかという意見があった。また対面と遠隔の同時進行で実施する場合に、どちらで受講しても自然な交流ができる技術あるいは手法が望まれるという意見もあった。それから、遠隔授業が定着するなかで、対面と遠隔の教育効果・学習効果の比較などの検証が必要ではないかという意見もあった。

一方で、学生や大学に視点を当てた意見のなかには、学習環境に関するものが多かった。学生に対するものとして、対面と遠隔の双方の利点を活かした講義を実施していく（例えば、1限：対面、2限：遠隔、3限：対面・・・）には、どこにいても遠隔機器が使える環境づくりが必要になってくるという意見があった。別の意見として、看護福祉学部独自の例えばフリースペースなどがあれば（大学全体でも良いかと思うが）、学生も大学生活を構築しながら、遠隔授業を楽しめるような工夫があるとよいかのではないかというものもあった。また大学に対しては、VR教材やAR教材の積極的活用に向けた大学全体による取組みを期待するという声もあった。

### 2.4.3 授業公開

看護福祉学部では、今年度の授業公開について、対面式の授業では実施しなかった。本学部の特徴でもあるが、専門職養成・専門領域に関する科目では、1つの授業に複数の教員が入り、常日頃からコミュニケーションを図りながら授業内容、教授法等を検討しているので、学部全体としての授業公開の実施には至らなかった。しかし、今年度を実施した遠隔授業に関する実態調査では、遠隔式の授業での授業公開の必要性は、多くの教員の意見から推察することができたので、来年度に向けて遠隔式の授業公開、部局内でのFD活動などを検討する予定である。

#### 2.4.4 授業改善への取り組みと今後の課題と展望

福井県立大学では、新型コロナウイルス感染拡大にともない、2020年度よりいち早く遠隔授業を導入した。ほとんどの教員が、昨年度より遠隔授業を経験し、今年度はコロナの感染状況に応じて、対面と遠隔の講義形式を臨機応変に行ってきた。これらのことから、対面授業での利点と遠隔授業での利点をうまく組み合わせながら、学生への講義内容の理解を図っていくことになった。

実態調査の自由記述の回答から、多くの教員が2年間の遠隔授業を体験し、このような授業形態にも徐々に慣れてきている段階ではないかと考えている。今年度は、昨年度に比べ、ほとんどの回答者が遠隔授業に対する利点や欠点を回答していた（昨年度は、回答者の4～6割程度）。また欠点を指摘する意見は昨年度に引き続き多岐に渡っていた（例えば、学生とのやりとり、学生間のグループダイナミクス効果など）が、遠隔授業に対する教員の負担という指摘はなかった。これらの意見を踏まえると、遠隔授業を学生に対してより効果的な教育効果・学習（修）効果につなげるための授業展開を考案していくという新たなステージに移行してきたといえるのではないだろうか。

一方、授業評価に目を転じてみると、大学全体は前期・後期を比較すると各評価項目の得点差は小さいが、看護福祉学部の評価では前期に比べ、後期の授業評価の得点が相対的に高くなっている。これは回答者数の違いはあるものの前期は遠隔授業が多かったこと（コロナ感染状況に応じて遠隔授業に切り替えたこと）が影響しているかもしれない。後期は予定されていた遠隔授業以外はほとんど対面での講義が実施され、特に評価項目の得点差の大きかった「内容理解」、「関心」については、この授業方法が学生にとって満足度が高いように思われる。看護福祉学部の教育目的は専門的な知識・技術・態度に基づいた対人援助を教授することであり、高度な専門職教育に加え、専門職として学び続ける生涯教育が必要になってくる。特に、後者の教育は、専門職になっても学び続ける姿勢や態度を育成していくために、学生の主体的な学びを促していくことが重要になってくる。そこで、本学部の教育では、いかに学生が専門教育や専門職教育に「関心」を寄せ、目まぐるしく変化する現代社会の中で、その時代に合った専門的知識・技術を「探求」し続ける素養を身に着け、地域・社会に貢献しうる専門職の育成できるかが課題になってくるだろう。

そのためにも、対面講義を中心にしながらも遠隔授業の利点（例えば、先進的な取り組みを実施している現場の専門職による講義・演習、先進的な研究を行っている他大学教員による講義、他大学との合同演習など）を活かしながら、学生の専門領域に対する「関心」を高め、生涯に渡って学び続け、その時代の人々の「健康」「生活」に寄り添っていく将来の専門職を育成することがこれからの本学部の教育の使命ではないだろうか。

## 2.5 学術教養センター（加藤裕美）

### 2.5.1 授業評価アンケートの結果

今年度の授業評価アンケートは、昨年度に引き続き WEB 上でのアンケートを実施した。また遠隔授業の負担が大きいことから、学術教養センターでは非常勤教員の担当科目については対象外とし、専任教員の担当科目のみを対象としてアンケートを実施した。

結果は、下記の図表に見られるように、学術教養センターでは、過去 10 年間に於いて、全項目で上昇傾向が続き、高い水準で推移している。これは、各教員の授業改善の努力の成果であろう。2021 年度は「意欲的」においては、昨年度より 0.02 上昇し、前期後期ともに 3.42 と過去最高数値となった。「授業方法」においても前期後期平均して 3.52 となり、2020 年度と同じく過去最高数値となった。「内容理解」「関心」においても昨年度同様に高い水準となっている。「総合評価」においても、前期後期平均して昨年度と同じく過去最高水準となった。

2021 年度前期は、前半が遠隔授業、後半が対面授業となった。また後期も一部遠隔授業がおこなわれ、予定通りには進まない状況であった。しかしながら、「授業方法」においても結果が高い水準を維持しているのは、個々の教員の対応の成果と言える。2020 年度以降は遠隔授業と対面授業が行われ、また学術教養センターにおいては対象科目がこれまでと異なるため、単純に比較することはできない。しかしながら、授業方法の変更がありつつも、全項目で高い水準を維持していることから、教員が授業の質を落とさぬように尽力した結果があらわれているものと思われる。

表. 学術教養センターにおける過去 10 年の授業評価アンケートの結果

一般教育	2012		2013		2014		2015		2016		2017		2018		2019		2020		2021	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
意欲的	3.17	3.22	3.18	3.2	3.24	3.21	3.27	3.26	3.31	3.29	3.32	3.3	3.34	3.36	3.39	3.39	3.42	3.38	3.42	3.42
授業方法	3.3	3.38	3.28	3.31	3.31	3.34	3.4	3.39	3.4	3.41	3.43	3.45	3.48	3.48	3.49	3.48	3.53	3.51	3.52	3.52
内容理解	3.08	3.16	3.07	3.12	3.15	3.16	3.22	3.2	3.23	3.23	3.25	3.27	3.31	3.28	3.33	3.36	3.31	3.28	3.3	3.31
関心	3.11	3.24	3.11	3.18	3.17	3.18	3.23	3.23	3.27	3.24	3.25	3.28	3.29	3.28	3.33	3.33	3.34	3.3	3.33	3.34
総合評価	3.31	3.42	3.28	3.34	3.35	3.38	3.43	3.4	3.44	3.43	3.44	3.46	3.49	3.5	3.51	3.5	3.59	3.57	3.58	3.58

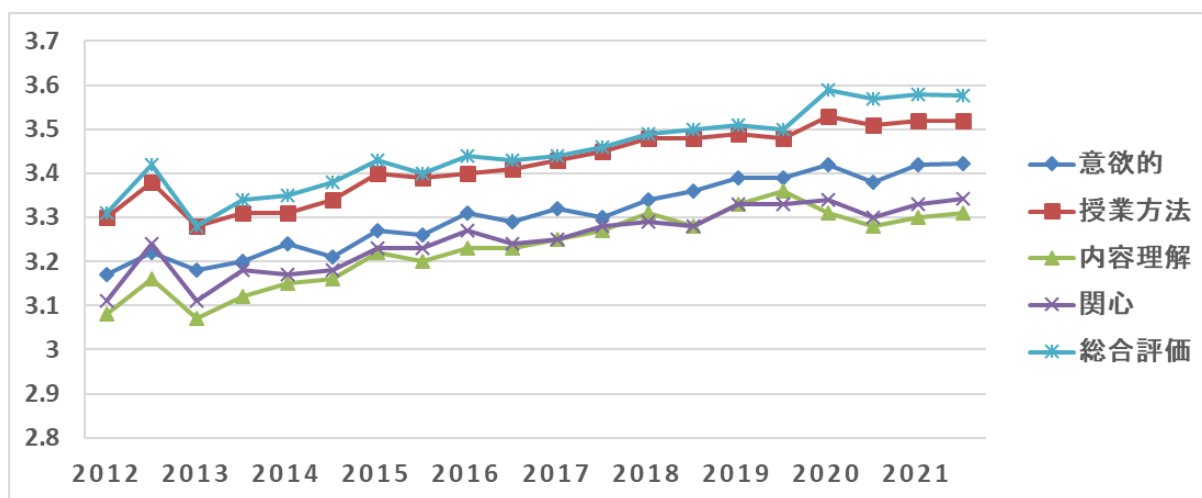


図. 学術教養センターにおける授業評価アンケート結果の推移

## 2.5.2 授業公開の方針と実績

学教センターでは、授業は常時公開となっており、教員同士の授業参観が随時行われている。2021年度は特に以下の学内公開授業と、オムニバス授業、授業参観が実施された。

### (1) 学内公開授業

2021年度は以下の3つの科目で学内公開授業をおこなった。

科目名：教師論

担当教員：國崎太恩

実施日：2021年7月16日

内容：「若者と人身取引」

参加状況：受講生以外の学生15名と学術教養センターの教員4名（加藤まどか、木村小夜、根田恵多、松本涼）が参加。

科目名：地域社会とフィールドワーク A

担当教員：山川修、石丸香苗

実施日：2021年11月27日

内容：学生の最終発表

参加状況：受講生、地域住民、自治体職員等約50名が参加。

科目名：情報処理 A

担当教員：石丸香苗

実施日：2022年1月18日

内容：学生が製作した動画の最終発表

参加状況：受講生を含めた学生と教員約30名が参加。

### (2) オムニバス授業

学術教養センターでは、2021年度以下の4つのオムニバス授業が開講された。オムニバス授業では、教員が担当回以外にも参観し、授業方法についての情報共有を行った。これは授業改善への関心を高めることが期待される。

科目名：教養特講 I（研究の世界）

担当教員：島田洋一、山川修、森英樹、木村小夜、清水聡、加藤まどか、加藤裕美、熊谷正、黒田祐二、中村匡、田中武之、小松恭代、ロレイン・サッカ

受講生：88人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

科目名：日本の文化と社会

担当教員：國崎太恩、杉村和彦、松本涼、田中武之、石丸香苗、浜本隆三、大石善隆、石原一成、

北村知之、ジャレット・デンマン、長岡亜生

受講生：98人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

科目名：比較文化論

担当教員：北村知之、亀田勝見、加藤裕美、森英樹、山川修、杉村和彦、石原一成、國崎太恩、中村匡、島田洋一、長岡亜生、ロレイン・サッカ、大石善隆

受講生：64人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

科目名：現代人権論

担当教員：根田恵多、加藤まどか、ジャレット・デンマン、渡邊浩一、徳野淳子、小松恭代、清水聡、木村小夜、黒田祐二、ほか

受講生：40人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

### (3) 授業参観

公開授業、オムニバス授業以外にも各教員が個別に授業参観を行い授業方法について情報共有を行った。

参観した教員：石丸香苗、加藤裕美、松本涼、渡邊浩一

参観した授業：宇宙科学、教養特講G（多文化共生）、西洋思想、南米の社会と環境、倫理学  
学内公開授業、オムニバス授業、授業参観は互いの授業のやり方を学ぶことで、自分の授業の改善につながる良い機会となったものと思われる。

### 2.5.3 FD研修

2021年度は、以下のFD研修が開催され、学術教養センターの教員が参加した。

FAA ふくいアカデミックアライアンス共同FD研修会「同時双方向型オンライン授業の可能性」

日時：10月28日（木）18:00-19:30

会場：オンライン開催（zoomミーティング）

研修会プログラム：

#### (1) FAA3校から事例報告

- ・山川修（福井県立大学学術教養センター）zoomの活用事例
- ・杉原一臣（福井工業大学）teamsの活用事例
- ・田中洋一（仁愛女子短期大学）zoomの活用事例

#### (2) パネルディスカッション 「同時双方向型オンライン授業の可能性」

- ・オーガナイザー：田中洋一
- ・パネリスト：山川修、杉原一臣

研修会の内容：

COVID-19 対策として 2020 年度からオンライン授業が急増した。オンライン授業では zoom 等を用いた同時双方向型と、YouTube 等を用いた非同期オンデマンド型がある。本研修会では、ポストコロナにおける同時双方向型オンライン授業の可能性について考えた。

また、授業方法の改善に関する以下のような講演会、シンポジウムに各教員が参加した。

シンポジウム名：「地域のリーダーシップを担う人材育成を考える」

主催：福井県立大学経済学部、大学院経済・経営学研究科

開催日：2021 年 11 月 4 日

場所：福井県立大学永平寺キャンパス 講堂

パネリスト：石丸香苗、山川修

内容：地域活性化を担う人材に必要なリーダーシップについて、授業「地域社会とフィールドワーク A」での実践を紹介した。

シンポジウム名：「オンライン（遠隔）体育実技における成績評価を考える」

主催：慶應義塾大学体育研究所、公益社団法人全国大学体育連合関東支部

開催日：2021 年 12 月 11 日

場所：オンライン

参加教員：石原一成

内容：遠隔体育実技における成績評価の内容及び方法について、Web アンケート調査による実態の分析及び実際の事例報告を交え、その課題について議論する。そして、ポストコロナにおける大学体育のねらいと意義を再構築する糸口を探る。

ワークショップ名：第 26 回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

主催：大阪府立大学工業高等専門学校

開催日：2021 年 12 月 26 日～28 日

場所：オンライン

メンター：山川修

内容：ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップにメンターとして参加した。

講座名：データサイエンス・オンライン講座「誰でも使える統計オープンデータ」

主催：総務省

受講日：2022 年 2 月

場所：オンライン

受講教員：石丸香苗

内容：情報の授業に応用するため、データサイエンスの概念・分析手法等について情報収集を行った。

フォーラム名：「第 10 回大学体育スポーツ研究フォーラム」

主催：公益社団法人全国大学体育連合北陸支部

開催日：2022 年 3 月 20 日

場所：オンライン

参加教員：石原一成

内容：大学体育で使える縄跳び運動について、縄跳び運動の魅力と効果、縄跳び運動の実践指導、大学における連鎖交互跳びの実践研究などについて情報交換を行った。

研究会名：漢字文献情報処理研究会 第 24 回大会

主催：漢字文献情報処理研究会

開催日：2022 年 3 月 20 日

場所：オンライン

参加教員：亀田勝見

内容：初修外国語としての中国語科目の非同期型オンライン授業についてや、オンライン授業の現状と課題、オンデマンド授業の諸形態とそれらの「適切」性について語学を中心としたオンライン授業における課題について情報収集をした。

#### 2.5.4 授業改善の取組みと今後の展望

2021 年度は授業改善について以下のような取り組みが行われた。

科目名：学術ゼミ（地域研究）

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：学生の希望に応じて内容を決定しており、今年はポルトガル語日常会話と学生の自主研究を中心にした。学生の希望によりオンラインで行ったが、最終回はブラジル料理の試食会を兼ねて対面で行った。

科目名：観光学

担当教員：加藤裕美

授業改善の取組み：観光学の理論と事例の両方を学べる構成にし、事例では、福井県、日本、世界とバランスよく学べるように留意した。最新の統計データやニュース記事を用い、時代の潮流にあった観光現象を理解できるよう努めた。学生が福井の観光地を訪れてフィールドワークを行い、グループで調べた結果をまとめ、スライドで発表をおこなう実践型の授業をおこなった。また、地元の観光に関する調べ学習では、各自で調べて終わるだけでなく、調査結果をグループで共有しポスター発表を行った。ツーリズム産業、エコツーリズム事業者、観光行政に携わる人によるゲスト講義をおこない、多角的に学べるように工夫した。小テストは毎回コメントを付けて返却し、学生の意欲向上に努めた。

科目名：教養ゼミ（エシカルな社会を考える）

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：前期は対面授業期間が短かったため、例年よりもコミュニケーションの機会を増やした。グループワークやペアワークの割り振りを、お菓子をを用いた抽選にして、アイスブレイクの機能を果たすように工夫した。例年行っている図書館でのディベート準備のための調べ学習については、批判的思考力における先行研究の重要性の説明に時間を割き、例年の一時間から二時間に増やした。

科目名：教養ゼミ（野生動物と人間社会）

担当教員：加藤裕美

授業改善の取組み：新たに坂井市竹田でフィールドワークを行い、地域社会における獣害、狩猟、ジビエの利用について実地授業をおこなった。フィールドワークでは地域の猟師さんに、狩猟の歴史、鳥獣害対策の実態について話をしてもらい、現場をみることによって理解が深まるように工夫した。後半ではグループワークを行い、理解した内容のまとめをおこなった。福井県鳥獣害対策グループ、福井県猟友会、美浜町の獣肉処理施設事業者によるゲスト講義をおこない、野生動物と人間社会の関係について多角的な理解ができるように努めた。授業の後半ではジビエを使った県大生向けメニューの考案と調理実習を行った。福井の地域資源を活用する実践的な試みを行った。

科目名：教養特講 G（多文化共生）

担当教員：加藤裕美

授業改善の取組み：福井における多文化共生の現状を理解するために新たに開講した。福井在住外国人の状況や、どのような問題を抱えているのかなど、地域の理解に資するテーマを設定した。福井県多文化共生グループ、福井県国際交流協会、越前市の日系ブラジル人の子供たちのサポートを行うみんなの食堂実行委員会などをゲスト講師に呼び、現場の状況を多角的に理解できるように努めた。授業の後半では、やさしい日本語に関するグループワークを行い、主体的に理解できるように工夫した。

科目名：情報科学 I

担当教員：山川修

授業改善の取組み：前半を反転授業形式で実施した。

科目名：情報基礎演習

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：2021年度もオンライン授業で始まったので、いつも対面で行う図書館の使いかたや図書検索ができなかった。図書館職員と図書館長の協力の下、動画を作成して大体教材として提供した。大学から提供されていた無線 LAN の接続インストラクションが分かりにくかったため、改良して情報担当教員や学内教員と共有した。情報基礎演習については毎年、徳野先生の主導によって、担当教員で手分けして教材の見直しや改善を行っている。

科目名：情報処理 A

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：2021 年度は最終上映会が対面で行えなくなったため、急遽オンラインで上映会を行った。また、近年は動画による広報の重要性が高まっているため、大学紹介動画の作成を最終課題として、公開上映会での投票によって選ばれた最優秀賞を事務局の協力により大学のオープンキャンパスページで公開した。

科目名：西洋史、神話学

担当教員：松本涼

授業改善の取組み：対面授業期間もオンラインで受講できる環境を整えた。具体的には教室での授業の様子を Zoom で配信・録画し、対面・Zoom・オンデマンド録画視聴のどの方法で受講しても可とした。配付資料も紙とデータの双方でおこなった。感染症への対策に加え、遠隔のキャンパスや就職活動などさまざまな理由で対面受講が難しい受講生も多かったため、おおむね好評だった。

科目名：体育実技 I、体育実技 II

担当教員：石原一成

授業改善の取組み：2021 年度受講生を対象に Web アンケート調査を実施し、コロナ禍における体育授業の受講に伴う教育効果（主観的恩恵や身体活動量）を把握した。これにより、ウィズコロナ期やポストコロナ期に教育効果を向上させる体育授業のあり方を検討する新たな視点を提供できたものと考えられる。

科目名：地域社会とフィールドワーク A

担当教員：石丸香苗、山川修

授業改善の取組み：地域社会をよく知るために希望に応じて宿泊を行ったほか、地域内の散策や体験学習を実施することで地域住民との接触の機会を増やした。そのために県から FAA の助成を頂いた。演劇型の課題解決提案発表会を公開で行い地域住民や県職員の方々の参加をいただいた。プレスリリースも出したがプレス関係は誰も来なかった。

科目名：中国語

担当教員：亀田勝見

授業改善の取組み：遠隔授業への切り替えに対する備えも兼ねて、ワクチン副反応による体調不良を理由とした欠席者のために、毎回授業で行った重要な指導内容を資料化して LMS に置いておいた。※授業の撮影動画ではない

科目名：地理学

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：地域理解とアクティブラーニングを目的に、兼定島での巡検を行った。今年度

は履修者が多かったため、加藤まどか先生のご協力をいただき前半と後半に分けて二班で行うことができた。ほかにも折り紙キットを利用した地形図の理解や、教室内を移動して理解する世界が 100 人の村だったらワークショップによる世界の経済格差など、身体を動かすことによる能動的参加を組み込んだ。各回の最初にその単元に関連したデータから考える小テストを行い、授業への能動的参加を促した。最後には振り返りを記述させ、小テストと振り返りは回収してコメントを付して返却し、蓄積していくことによって授業のポートフォリオの役割を果たすようにした。

科目名：哲学、倫理学

担当教員：渡邊浩一

授業改善の取組み：各回の予習課題および授業課題について比較的詳しくフィードバックを行った。また、適宜参加者間でのペアワーク・グループワークを実施した。教員から学生への一方向の知識・情報伝達にとどまらず、講義科目においても学生から教員、また学生間の双方向・多方向のやりとりが生じることを企図してのものであり、同じ学生の多種多様な考えを知ることができるという点で参加者の反応も良好だった。

科目名：東南アジアの文化と社会

担当教員：加藤裕美

授業改善の取組み：時事的状況を理解するために「ミャンマーでの何が起きているか」と題して、ミャンマーのクーデターに関する単元を新たに加えた。各学部の学生が東南アジアとのかかわりについて理解できるように、経済学部の学生向けには「東南アジアの経済」、生物資源学部の学生向けには「東南アジアの自然と生業」、看護福祉学部の学生向けには「東南アジアの医療・看護の現状と課題」、海洋生物資源学部の学生向けには「海の東南アジア」と、取り扱う内容を工夫した。国際協力機構や日本貿易振興機構の職員によるゲスト講義を実施し、多角的な視点から理解できるように努めた。小テストには毎回コメントを付けて返却し、学習意欲の向上に努めた。

科目名：導入ゼミ（なぜ？から考える科学）

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：予期せぬオンライン転換などがあったため、全体的に学生間のコミュニケーションが希薄になっていたため、miro や Google スプレッドシートなど Zoom 以外のオンラインシステムを利用したコミュニケーションの機会を増やした。また、ブレイクアウトルームをなるべく多用した。

科目名：導入ゼミ（はじめての東南アジア）

担当教員：加藤裕美

授業改善の取組み：今年度は前期の前半が遠隔授業となったため、学生間のコミュニケーションを円滑に行うために、Zoom のブレイクアウトルームを使い、ほぼ毎回グループワークやグループディスカッションを行った。対面授業になってからも、毎回グループワークを行い、意見交換、

合意の形成に力を入れた。最終発表では、東南アジアの民族衣装を着てグループごとにまとめたテーマについて発表を行ったのが好評であった。授業の最後に自己評価と相互評価を行うことにより、取組みについて学生相互に評価をおこなった。

科目名：東洋思想

担当教員：亀田勝見

授業改善の取組み：遠隔授業への切り替えに対する備えも兼ねて、ワクチン副反応による体調不良を理由とした欠席者のために、毎回授業で行った重要な指導内容を資料化して LMS に置いておいた。

科目名：南米の社会と環境

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：コロナ時代の世相を反映するため、南米におけるコロナへの対応と政治というテーマの単元を加えた。授業が単調にならないよう、日系移民や青年海外協力隊ののゲストスピーカー回や、資源資源を利用した先住民の工芸づくりの回などの工夫を行った。各回の最初にその単元に関連したデータから考える小テストを行い、授業への能動的参加を促した。最後には振り返りを記述させ、小テストと振り返りは回収してコメントを付して返却し、蓄積していくことによって授業のポートフォリオの役割を果たすようにした。

科目名：認知科学

担当教員：山川修

授業改善の取組み：ハイフレックスで授業をおこなった。

科目名：倫理学、西洋思想

担当教員：渡邊浩一

授業改善の取組み：学生のレポート執筆能力の底上げを主たる目的として、希望者に対して期末レポートの個別フィードバックを実施した。計7名（倫理学6名、西洋思想1名）から申込があり、対面ないし Zoom で1～2時間程度、詳細な講評を行った。担当者にとっても、学生の学習の実態や興味関心を把握し、今後の授業改善につなげるうえで貴重な機会となった。

科目名：歴史学特殊講義

担当教員：松本涼

授業改善の取組み：アイスランドの歴史と文化を扱ったが、オンラインで大阪やアイスランド在住のゲスト講師を招聘することで、幅広い視点や内容の講義をおこなうことができた。

そのほかの取組みとして、導入ゼミの授業改善のために、担当教員にアンケートを行い、指導内容に必要な条件の検討を行った。また、導入ゼミ教材の共有サイトを LMS 上に作成し、知識や情報を参照できるような教材を集めて共有している。書籍の教材は、経済学部棟 10 階の事務室書架に配置し、いつでも手に取れるようにしてある。また、導入ゼミ関連教材は「大学での学び補助教材

サイト」としてまとめ、教員および学生が参照できるようにしている。

コロナ禍が継続している 2021 年度においても、様々な授業改善の取り組みがなされた。その成果は、授業評価アンケートの数値からも読み取ることができる。授業評価アンケートは、学生からの数値であり、学生の力が客観的に伸びているかどうかを測るものではない。しかし、その数値からは個々の教員による授業改善が着実に進められていることを、読みとることができるだろう。次年度においても対面授業と遠隔授業が切り替わったり、研究室ではなく自宅で遠隔授業を実施するようになったりと、不測の事態に対応せざるを得ない状況がおりうる。2021 年度におこなわれた新しい試みの数々は、次年度以降にも生かせるものであろう。今後も状況に応じて、工夫を重ねて、より良い授業の実施方法を模索していく必要がある。2021 年度の実践を糧に、新たな授業展開と教育につながるものと期待したい。

ファカルティ・ディベロップメント報告書2021

---

発行年月 2022年3月

編集・発行 福井県立大学FD部会